

山に親しみ山に想う (25)

— 鷄龍山国立公園紀行 —

<文・写真> 岡本

鷄龍山(ケリョンサン)国立公園を探訪した2003年5月当時、韓国には20ヶ所の国立公園があって、内15ヶ所は山岳地の国立公園であり、他の5ヶ所は海岸風致地域(4ヶ所)と古都慶州であった。鷄龍山は2番目(1968年)に指定された名門の国立公園である。忠清南道公州市と大田広域市の境界にあって韓国のほぼ真ん中に位置する。歴史的には、三国時代より百済の霊峰として中国にも知られてきた名山と言われる。鷄龍山の山名は、最高峰の天皇峰(標高845.1m)と大小28のピークの総称である。天皇峰を中心に他の峰々の山影が鶏の鶏冠に似た角をもった龍のように観えることから称されたという。



2003年当時、残念ながら観音峰(標高816m)から天皇峰に続くサルゲ尾根が通行禁止になっていたため(現在も)、山行コースは東鶴寺(注1)－隠仙瀑布－観音峰－自然稜線－三佛峰－甲寺(注2)という一般的なものとなった(登山案内によれば、距離7.1km、所要時間4時間)。

山行は5月8日から9日にかけて1泊2日、8日は「父母の日」と「仏様がいらっしゃった日」という二つの祭日に当たっていた。8日8時半に家を出た。5月としては涼し過ぎる風が吹いていたが、一点の雲もない五月晴れである。地下鉄でソウル江南の高速バスターミナルに行き、9時半発大田行きに乗った(一般席7000ウォン)。祭日は高速道路が普段より空いており、2時間で大田バスターミナルに着いた。降車の際、運転手に東鶴寺行きバスの乗り場を尋ねたので迷うことなくバス停に直行でき、11時50分発の終点東鶴寺行きに乗ることができた(1300ウォン)。1時間後には東鶴寺バス停に着いた。

「仏様がいらっしゃった日」とは、釈迦誕生日のことである。「鷄龍山東鶴寺」詣の参拝者で参道は、ハイカラな商店は勿論ないものの、明洞(ソウルの繁華街)を彷彿させる程の煩雑さであり、東鶴寺専用駐車場は満車の状況だ。若者が高齢の爺さんや婆さんの脇を支えている姿が微笑ましい。多くの参拝者は胸に「奉祝 仏様の慈悲」のリボンを付けている。ここが山間地であるので門前町を形成できないものの参道の両側には、土産物店と食堂が櫛の歯のように並んでおり、それらの店々が信仰篤き人々から一儲けするぞという世俗の匂いを紛々と発しているのが感じられて、辟易となるのだが、それ以上に参拝者の人波に混じっている自分が登山姿でいることに気

恥ずかしさを覚えた。途中、小さな店構えの登山用具店でストックを買った(10000 ウオン)。もともとストックは使わないのだが、用心しての警棒がわりである。

午後1時半に東鶴寺切符売り場に着いた。今日は祭日なので無料だという。通常だと、入山料1300 ウオンと文化財観覧料(東鶴寺)1300 ウオンが一枚綴りになった入場切符を求めることになる。切符売り場の傍の国立公園管理事務所兼ビジターセンターで登山コースの地図を貰い、職員に「事前に調べたところでは、自然稜線コースは少し厳しいように紹介されているが、どうか？」と尋ねると、別の引出しからより詳細な地図を出してきて「昔、鉄柵がない時は少し危険だったが、今は鉄柵と階段が完備しており危なくないし、稜線コースは登山気分が味わえる。易しいコースは溪流沿いで眺望はないよ。」と優しく説明してくれた。予定どおり稜線コースに決めた。職員から700m程降った寺の専用駐車場下に民泊村があることも教えてもらった。

今日のこの人出だと早く宿を決めるのが得策だと考え、すぐに踵を返して民泊村の屋号「ムンピル峰」に部屋をとった。壁に小石を嵌め込んだモダンな外観の二階建てであるが、部屋は普通で6畳くらいのオンドル部屋にテレビ、トイレ、洗面台があるだけ、これで十分である。料金は25000ウオンの先払いである。料金表がある訳でなく、おばさんの言い値を払ったが、2、3軒当たって相場を調べてみるべきだったと少し後悔した。「深夜特急」の著者に倣って旅はけちってみるものだろう。当時の韓国は民泊代も交渉次第で安くなる時代であった。

時間はまだ2時過ぎなので、今日中に東鶴寺を参拝しておくことにした。切符売り場まで700m程、更に1.3kmで東鶴寺である。2時50分に山門を潜る。大雄殿境内には、縦横に張られた紐に蓮華の形や真っ白の丸形の提灯が吊り下げられている。満艦飾。提灯の先には献灯した人か、亡くなった人かの名前が書かれた短冊が垂れている。大雄殿の内では、キンキラキンに輝く三尊仏の前で敬虔な祈りが捧げられている。ハタオリバッタのように頻りに上体を屈伸してるお婆さん、拝跪するお爺さん、でんぐり返るほどに床に頭を擦り付けている人、合掌黙禱する人、大声で念仏を朗誦する人など無秩序の中にも信仰の熱気が伝わってくるのが良い。自分も境内入口で貰った「奉祝 仏様の慈悲」のリボンを胸に着けて合掌した。



東鶴寺の帰途、セブンイレブンでポカリ、お茶、菓子パン、カメラ用電池、フィルムを買った。

夕食は民泊隣の食堂でソルロン湯(肉汁飯、5000 ウオン)を食べた。味は濃厚とは言えないが、美味しかった。シャワーも浴びず早々に床に就いた。

東鶴寺の大雄殿

翌9日は6時半に起床、朝食はアンパンで済ませ、「ありがとう」のメモを残して民泊を出た。背には2リットル以上の水分をたっぷり準備した。早朝の東鶴寺への参道は、昨日の昼とは打って変わって森閑としており、時折り小型車が追い越していく。リズムを刻むような溪流の瀬音が心地よい。切符売り場で2600ウオン払った。大雄殿の裏手を過ぎた所で参道は終わり、登山道になる(8:00)。その道の道標には、隠仙瀑布(避難所)1.3km、観音峰2.3km、三佛峰3.9km、甲寺5.3kmとある。

東鶴寺溪谷の溪流沿い歩きが続く。小さいが水量豊かな滝が腕を伸ばせば届くあたりに落ちている。(溪流に沿って歩きつ 耳凝らし 知らぬ小鳥の 囀りを聴く) 杉や檜のような針葉樹はなく、明るい自然林なので野鳥が多く生息しているようだ。(チョコチョコと 先いく小鳥 首かしげ ちょっと振り向き 何やら語る) 名も知らないヒヨコぐらいの野鳥が数メートル先をチョコチョコと先導するように飛び跳ねていく。ふと振り向いて語り掛けるように首をかしげた。ハンミョウ(斑猫、ミチオシエ)の経験はあるが、鳥の先導は初めてだ。信仰への導きか。

道標「観音峰1.3km」「東鶴寺1.2km」に着く(8:30)。ここまでの山道には自然石が敷かれて歩き易かったが、それもなくなり急傾斜になり始める。道標より10分程で、形が足踏み臼の支柱(サルゲ)のように見えるサルゲ峰(標高827.8m)を岩稜線上の正面に展望できる地点に着く。右方向には薄褐色の岸壁を隠仙瀑布が落下している。滝の名称は神仙が隠棲する仙境の滝を意味しているが、名前負けしている。渇水期には滝が消えるというが、一昨日の降雨で滝を観ることができたのは幸運であった。滝のすぐ先に避難所と休憩所の売店があって、コーヒー、ラーメン等を売っていたが、素通りして1km程先の観音峰へ急ぐ。滝辺りから傾斜が増し、落石注意の立て札が立っている。1時間程掛かって、観音峰峠に着く(9:50)。標高410mの滝から1時間で368mを稼いだ。峠の名札の左側に道があったので進んだところが、降りが続くので道迷いであることに気付き引き返した。名札の右側に岩稜上の道があった。15分程の浪費となった。ペンキの矢印がある岩稜を注意深く歩いて観音峰に着いた(10:13)。天皇峰、サルゲ峰に次ぐ鶏龍山の主峰の一つであり、登り得る最高峰である(天皇峰とサルゲ峰は登攀禁止)。頂上の岩峰上にクワンヌンボンと山名が彫られた石柱がある。手摺りも柵もない。石柱に触ろうと試みたが中止した。南方向に伸びるサルゲ尾根上に天皇峰が観えるが断念して、北東方向の自然稜線の1.7km先にある三佛峰(標高775.1m)に進むルートをとった(10:20)。標高800mレベルの自然稜線には、360度の眺望の利くポイントが幾つもあった。東鶴寺の伽藍が薄紅色気味に見えるのは、提灯の色か。岩稜や岩峰が多いのに気付く。山腹にも岩肌が目立つ。高木が少なく、杉檜がない。御蔭で韓国に赴任して花粉症に悩まされることがなくなり助かっている。眺望を楽しみ過ぎたこともあるが、岩稜歩きのために、歩速が著しく遅くなった。漸く、正午直前に三佛峰に着いた(11:55)。観音峰から



1.7kmの三佛峰まで1時間35分掛かったので時速1km程の進み具合であった。三佛峰の頂上は幅5m、長さ10m程の矩形をした岩峰である。眺望は良く、歩いてきた自然稜線の岩稜が所どころ白く浮いているように観える。直ぐに降って、観音峰、神仙峰、甲寺の三分岐である三佛峰三叉路(675m)から2.7m先の甲寺へ道をとる。

観音峰山頂

三佛峰三叉路に来るまでに後方より抜いていった者3名、前方から来て擦れ違った者5名で、10名の登山者にも出くわしていない。有名な登山コースなのに登山者が少ない理由は、「仏様がいらっしやっただ日」という特別の日だからなのか。

甲寺への途中にある広場のようなクムチャンデイ峠(標高638m)にはヘリポートがあり、3グループが昼食中である。歩きながら食べたアンパンを昼食代わりにして先を急いでいると、社旗を掲げた社員グループ一行30名程が登ってきた。甲寺登山口から広い草原のクムチャンデイ峠までは家族向きコースなのだ。4、5人から頂上の峠は未だかと疲れた声で尋ねられた。「直ぐ頂上だよ、後50mくらいかな」と応えると、彼らはにやりとした。こんな行楽半分の団体と会うと、心が和むのはなんでだろう。美人の女子社員が多いからか、否、深刻に登っている自分への自嘲の裏返しだろうか。一行が過ぎると、静寂が戻る。前後に誰もいない。遠く微かに溪流の瀬音が聞こえてきた。やがて、幅1m程の溪流沿いの道になった(12:50)。降るにつれ逞しい流れになった。祈禱所のシンプ庵(標高375m)を過ぎ、小粒ながら滝らしい趣の龍門瀑布に着く(13:20)。滝から15分程で甲寺に着いた。



観音峰からの展望

甲寺の大雄殿境内では、10名程のおばさんが昨日のお釈迦様の日に献灯された提灯を降ろし、貼られた紙を剥がして骨だけ回収する作業をしていた。献灯には幾らのお布施が要るのか尋ねると、「一灯、3万ウオンもらう。こうして破るのも功德だから、あんたもやってみませんか。昨日は大学生がたくさん来てくれましたよ。」と言う。一つ手に取って破ってみた。すると、バナナを食べろ、真桑瓜を食べろ、と愛想よく勧めるものだから、ご馳走になりながら20分程作業を手伝った。甲寺を後にして(14:05)、甲寺切符売場、人影が疎らになった食堂、土産物店街を歩いて、バス停に着いた(14:25)。運良く5分後に出発のソウル行き高速バスに乗ることができた(7400ウオン)。車窓から観る田舎の景色は、田植え前の田圃に水が張られており、数日すると本格的に田植えが始まりそうな様子である。

途中、公州、天安に停車し、渋滞もあって南ソウルターミナルに到着したのは、18時10分になった。

(了)

(注1) 東鶴寺 新羅聖徳王23年(724年)に上願祖師が開基したと伝えられる。再建を繰り返した。鷄龍山四大寺の一つ。(寺の案内板)

(注2) 甲寺 百濟久爾辛王元年(420年)に高句麗の阿道和尚が創建、新羅義相大師により華嚴宗道場となる。華嚴宗10大寺の一つ。再建を繰り返した。(寺の案内板)